

【開催概要】

- ・日時：2018年11月24日（日）
- ・会場：愛知県民の森「モリトピア」（愛知県新城市）

【全国登山研究集会とは】

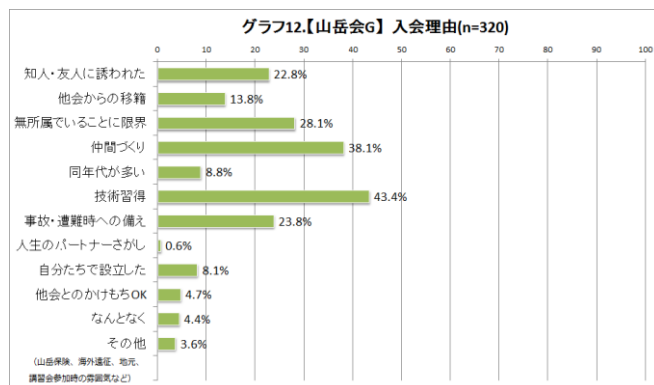
全国登山研究集会（全登研）は、日本勤労者山岳連盟（労山）がすべての登山者を対象に、労山の創設期から定期的に開催している集会です。直近では2016年11月に東京で開催し、今回は2年ぶりとなります。11/23-24の2日間にわたって行われ、初日は登山家で写真家の小松由佳さんの特別講演のほか、労山に加盟している各山岳会の活動報告などが行われました。

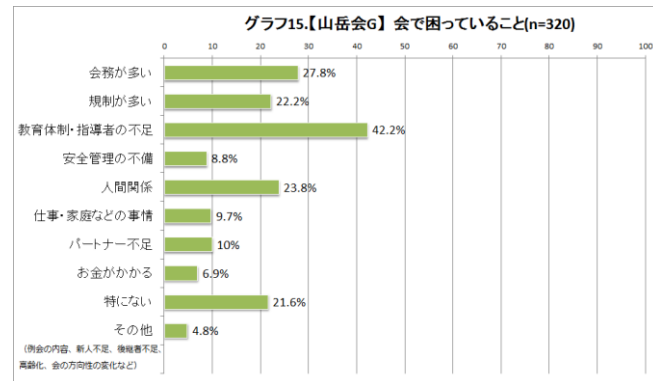
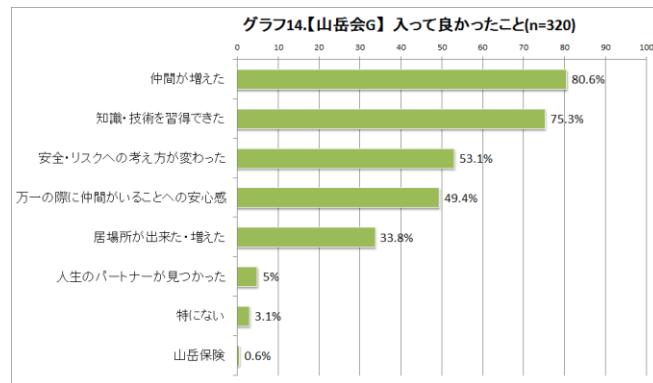
2日目は、各分科会に分かれ、第四分科会では「若い世代の交流」をテーマに、参加した22名の登山者が日頃感じていることや課題、今後の展望などを話し合いました。

【分科会の目的】

本分科会は「若年層会員の交流」をテーマに、各連盟・会の現状を把握するとともに、これから担う若手をどのように会に迎え入れ、さらには連盟の活動に参画してもらうかを話し合いました。参加者の多くは30代後半～40代でしたが、「若手が会や連盟活動をどう考えているのか知りたい」というベテラン会員の参加もあり、多様なテーマで話し合いをもちました。

全登研開催に先立ち、10/1-10/31に「登山者と山、登山者と山岳会に関するアンケート調査」をインターネット上で実施。その結果、458件（労山関係者6割、他山岳会関係者1割、退会者1割、無所属2割）の回答がありました。山岳会の入会理由は「技術習得」、入って良かったことは「仲間が増えた」、会で困っていることは「教育体制・指導者不足」がそれぞれトップでした（下記グラフ参照）。自由記述の意見では、「若者に合った会のあり方を」「多様性と安全知識の共有」「若者の育成と指導者の充実が急務」「高齢化に伴う会運営の困難化」「会・連盟の運営に携わる人々の若返り」「入会して良かったが運営の負荷が大きい」といった意見が寄せられました。





【各連盟・山岳会の悩み】

はじめに、参加者自身に取り組んでいる山行や所属会の特徴などを紹介してもらいました。共通の悩みとしては、「新人が参加しない。参加してもすぐに辞めてしまう」「指導者が不足している」「会の運営に携わってくれない」「情報発信の在り方」といったものが多くみられました。また、同じ労山所属の山岳会であっても、山行内容（登攀系、ハイキング系）や会の運営形態（例・会山行主体の山岳会なのか、保険・遭難時のための同人なのか）、さらには地域によって、会の運営形態が大きく異なることが分かりました。

【若者が感じる“わずらわしさ”をどう解消するか？】

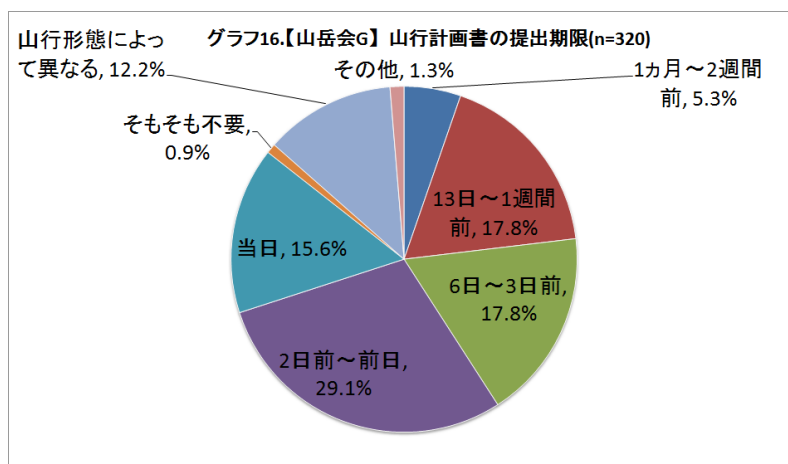
参加者から「若い人はわずらわしいことを嫌がる」という意見がありました。その一例として、「山行計画書の提出」の扱いについて話し合いました。事前に実施したアンケート調査で、山岳会（労山ほか）所属者に対して「山行計画書の提出期限」を聞いたところ、下記グラフのような結果となりました。分科会では、計画書の扱いについて、「代案の計画を2～3提出している」「1週間前に提出して会に了解を得なくてはいけない。天候によっては山域を変える場合もあり、代案も一緒に提出している」「計画書の提出期限は、山行計画を問わず2週間前」「提出期限が厳しく、無届け山行をしているケースもある」などが報告され、各会の現状が浮かび上がってきました。

山行計画書の意義は、計画を立案・作成することで目的を明確化するとともに、各方面（メンバー、会、家庭など）と情報共有、計画のチェック・修正（落とし穴がないか）、そして万が一の場合に備えて“足跡”を残すことにあります。提出期限については各会の方針があるので一概には言えませんが、情報伝達手段が発達した現代の情勢に合わせたものになっているか、

今一度見直す必要があるかもしれません。

また、多くの会で計画書に基づく「山行管理」が行われていますが、「上（ベテラン）からの押しつけではなく、根拠を明確に示した上で、技術・経験が少ないビギナーを導く視点での助言が必要なのでは」という意見が寄せられました。

会に所属している若手は、所属することによる“わずらわしさ”よりも、教育や相互扶助といったメリットを感じています。一方、無所属の登山者には、メリットよりも計画書提出や運営、人間関係といった“わずらわしさ”が多いと映っているのかもしれません。



【会運営の担い手をどう育てるか？】

運営を“わずらわしい”と思うのは若手に限ったことではありませんが、仕事や家事・育児に忙しい世代にとっては、特にそう感じるものです。若年層が山岳会を辞めてしまう理由としても、結婚・出産・就職といった「生活環境の変化」は決して小さいものではありません。忙しい日常生活の合間に山に行き、さらに会や連盟の運営となると、「とても手が回らない」となるのが実情です。他方で、ベテラン層は高齢化が進んでおり、世代交代は喫緊の課題となっています。

この問題に対して、参加者からは「共働き、協働家事、育児が必須になっている現代の事情と、(従来の運営方法や負担を求める)ベテラン層との相互理解が十分にできていないことが、世代間ギャップを生んでいるのではないか」という意見が寄せられました。

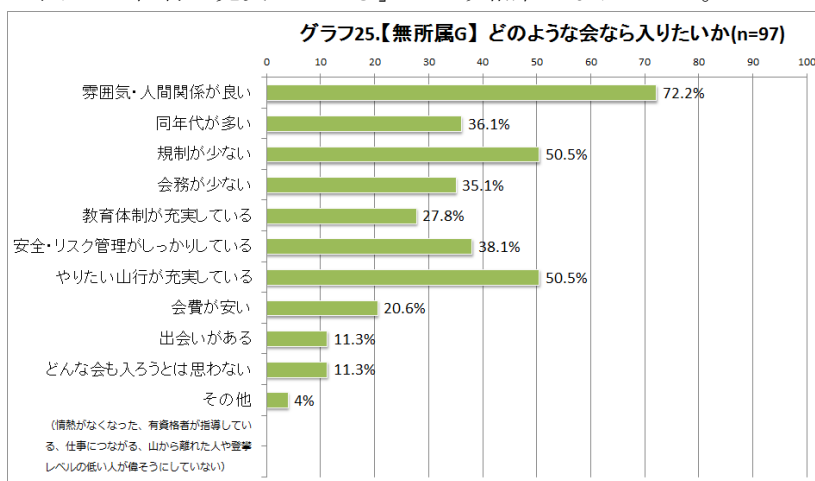
若年層の会員が多い会では、「入会のハードルが低く、サークル感覚で入る人が多い。しかし、運営の分担をお願いすると、それを嫌がって辞めてしまう人がいる。山岳会としてのレベルをどう保つか難しい」という意見が聞かれました。「若手が多い」というと、それだけで活気があるようなイメージがありますが、内情を聞くと、他の山岳会同様、運営を担っていく人材の確保が課題になっているようです。

別の角度からは、「若手の場合、クライミング系は定着することが多いが、ハイキング系はすぐに辞めてしまう場合が多い」という意見も。背景には現代社会における趣味の多様化・細分化があり、「登山が数ある趣味の1つになっており、(自分の中の)ブームが去ったら登山自体も辞める傾向にあるのでは」という指摘がなされました。クライミング系の場合、スキルの習得、パートナーの確保という観点で山岳会に所属するメリットがあります。ハイキング系でも、シニア世代中心の会では着実に会員数を増やしているケースがあります。

この中で、ベテラン参加者からは、「山岳会での知識・技術伝承は、仲間と切磋琢磨し高め

合うことが基本」「山岳会が社会的に一目置かれる（＝必要とされる）ためには、日々鍛錬し実績を残すことが必要」という意見が挙がりました。それらをさまざまな媒体で積極的に情報発信し、山岳会の魅力をアピールしていく必要があります。

なお、事前のアンケート調査では、山岳会に入っていない無所属の方に対し「どのような山岳会なら入りたいか」（下記グラフ）と聞いたところ、上位から「雰囲気・人間関係が良い」「規制が少ない」「やりたい山行が充実している」という結果となりました。

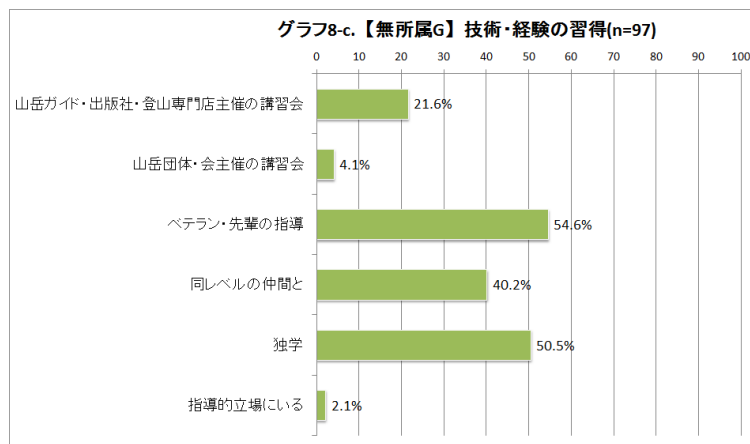
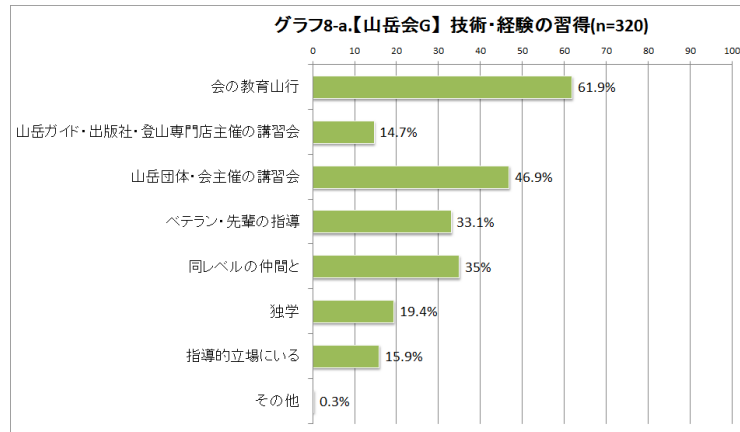


【教育は要】

山岳会と言っても、そのかたちは実に多様です。教育山行や会山行が充実している会、個人山行を優先させている会、捜索・救助時の相互扶助を目的とした会（同人）など、あらゆる登山者の志向や考え方に合わせた多種多様な会が全国で、積極的に、事故なく活動している状態が理想です。特に、次の時代を担う人材の教育は不可欠で、「自立した登山者」の養成は、山岳会・山岳団体に課せられた使命だと言えるでしょう。

しかしながら、実情は「教育・指導体制の不足」に困っている会が少なくありません（前出のグラフ参照）。各連盟では、講習会や登山学校を開催することでそれらの補完を行っています。分科会には各会・連盟で講習会、登山学校の講師を務めている方々の参加もあり、それぞれの活動内容や課題を話し合いました。その結果、ほとんどの場合、講師は手弁当で講習を運営しており、時間的・労力的な拘束が非常に大きいことが分かりました。中には「（講習期間中の）夏の間はまったく自分の山には行けない」という方も。講師の確保も大きな課題で、講習・学校卒業者の中から講師を育成しているが、生活環境が変わりやすい若手の確保に苦労している現状が伺えました。

事前アンケート調査で「技術・経験の習得」を聞いたところ、山岳会所属者は会の教育山行や講習会を活用している半面、無所属の方は、山岳ガイドなどが主催する講習会には参加しているものの、山岳会・山岳団体主催の講習会には参加が少ない結果となりました。公開山行や一般登山者も対象とした講習会の周知も、今後さらに必要なようです。



【横のつながりについて】

各会と連盟の関係性についても言及がありました。若手の参加者からは、「県連の活動で出来た若年層同士の横のつながりを活かして（会以外の人と）山行を計画すると、会のベテラン層から『会に還元してもらうために県連に派遣したので、会活動をしっかりやってほしい』と言われる」という悩みも。

各連盟の講習会や登山学校にはさまざまな講習生が集まります。そこで他会のメンバーと知り合い、山行を共にすることも少なくありません。特に、ステップアップを始めたばかりの若手登山者にとって、山の志向が近く、かつ同レベルの技術・経験をもつ仲間は大変貴重です。同時に、講習会や登山学校などの「学びの場」を通して、自分自身の力量がどの程度なのかも分かってきます（何が足りていて何が不足しているのか）。そのため、「まずは経験を積んで力をつけなければ」という気持ちが強くなり、横のつながりを活かして会以外の仲間とも積極的に山行を計画することが多くなるようです。一方、会のベテラン層からすれば、世代交代の意味も含めて、「（講習や登山学校で）技術を身に着けたのだから、リーダーとして会運営に携わってほしい」という要望があります。若手に会を引っ張ってほしいベテラン層と、十分に経験を積んでから会に貢献したいと考える若年層。この辺りにもギャップがあるようです。

山岳会の中での活動を「縦軸」とすれば、会の枠を超えた活動は「横軸」だと言えます。ただし、「横軸」の山行は、山行管理という観点では、「会員がどんな技量・経験の持ち主と山に入るのか分からない」という側面があります。日頃、自分がどのような人とどのような山に行っているのか、会員間で情報共有を行い、綿密なコミュニケーションを図ることが重要です。

【まとめ】

普段なかなか会うことのない労山の仲間たちが、さまざまな問題や課題を抱えながらも、先人が築きあげてきた登山文化の伝承に尽力している様子を窺い知ることができました。

「山屋は山に行っこそ山屋」であること。組織の枠組みにとらわれず、幅広い視野で登山者（特に若手）一人ひとりの山行を後押し、手助けする山岳会、山岳連盟のあり方について考えていくこと。そして、同じ思いの仲間たちとの交流を続けていくことをまとめとして、分科会を締め括りました。

おまけとして、最近の冬季クライミング装備の紹介と、危険な支点として「アメリカンデストライアングル（ADT）」について、実体験を交えて情報共有しました。



(支点崩壊の危険が非常に高いアメリカンデストライアングル)

以上